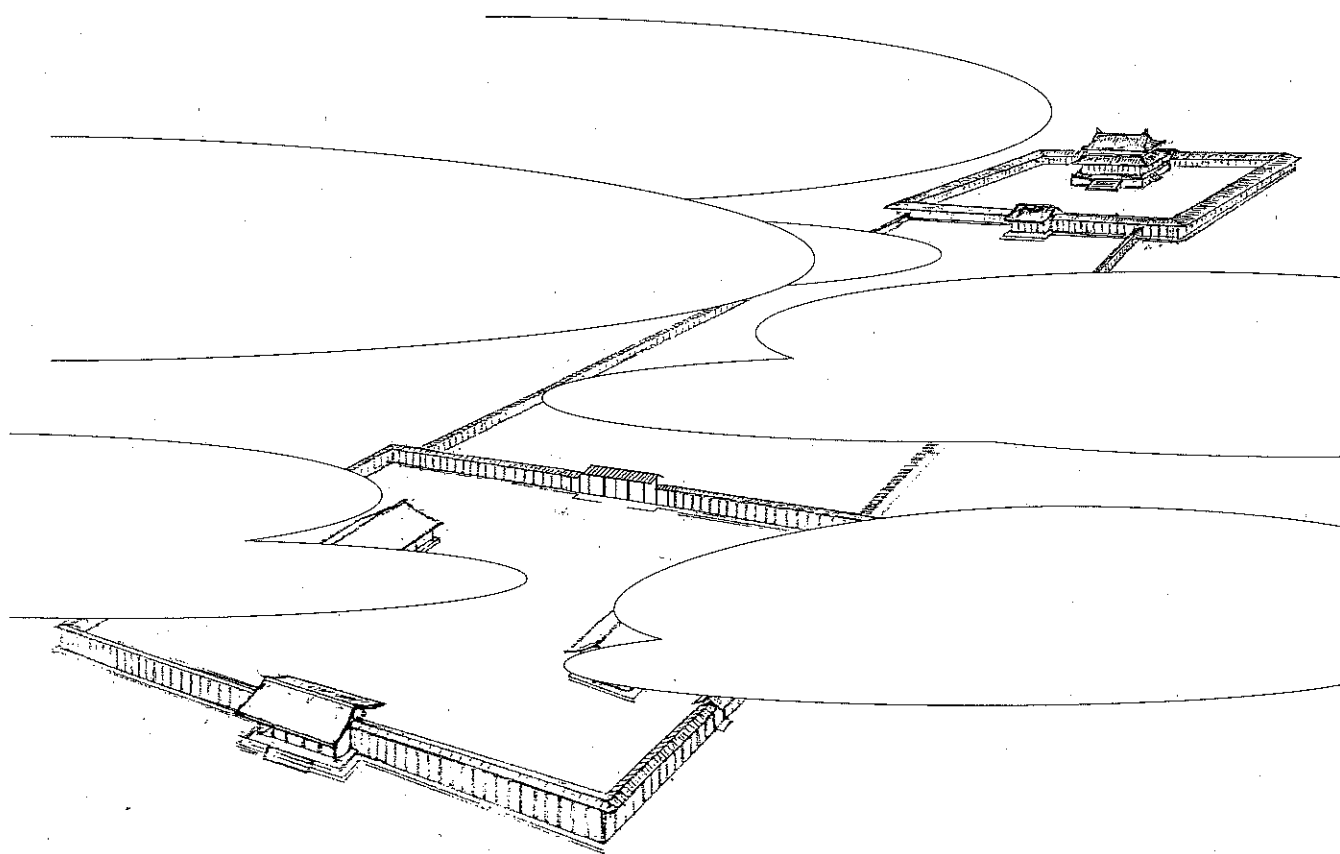


平成 26 年度
恭仁宮跡発掘調査（第 94 次）
現地説明会資料



京都府教育委員会
平成 26 年 12 月 7 日（日）

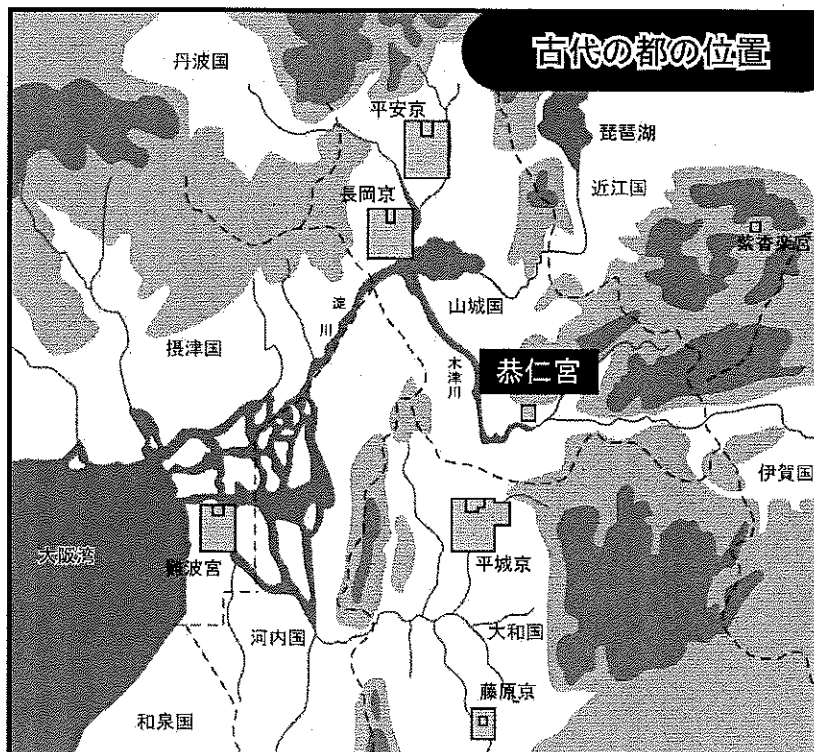
はじめに

京都府内には、古代に平安京、長岡京、恭仁京という3つの都が造られました。京都市の中心部に造られた平安京は、延暦13(794)年から明治元(1868)年までその役割を果たした、いわゆる「千年の都」です。また、平安京に都が遷される直前の延暦3(784)年からの10年間は、現在の向日市・長岡京市・京都市・大山崎町にかけて造られた長岡京で政務が行われました。

そして、この3つの中では最も古く、今からおよそ1270年前の天平12(740)年に、聖武天皇により、現在の木津川市加茂町、山城町、木津町にわたって造られたのが「^{くにきょう}恭仁京」、その中心となるのが、加茂町^{みかのはら}瓶原の地に造られた「^{くにきゅう}恭仁宮」です。

宮の中には、主に天皇が暮らし、さまざまな儀式などが行われた内裏、政治や国家の儀式などがおこなわれた^{だいごくでん ちようどういん}大極殿や朝堂院、さらには官人達が仕事を行った役所(官衙)など、国の中でも最も重要な施設が造られました。恭仁宮を中心とする木津川市の一帯は、短期間ながら国の首都となっていたのです。

しかし、そのわずか4年後の天平16(744)年には、都は大阪の^{なにわのみや}難波宮へと遷され、さらには平城京へと戻されることとなりました。恭仁宮は、その役目を終えた後、天平18(746)年に山城(山背)国分寺へと造り替えられました。



これまでの調査成果

昭和48年度以降、京都府教育委員会や加茂町（現木津川市）教育委員会が毎年実施している発掘調査によって、宮の範囲、大極殿や内裏などの宮内の主要な施設が見つかり、恭仁宮の実体が少しずつ分かってきました（第1図）。

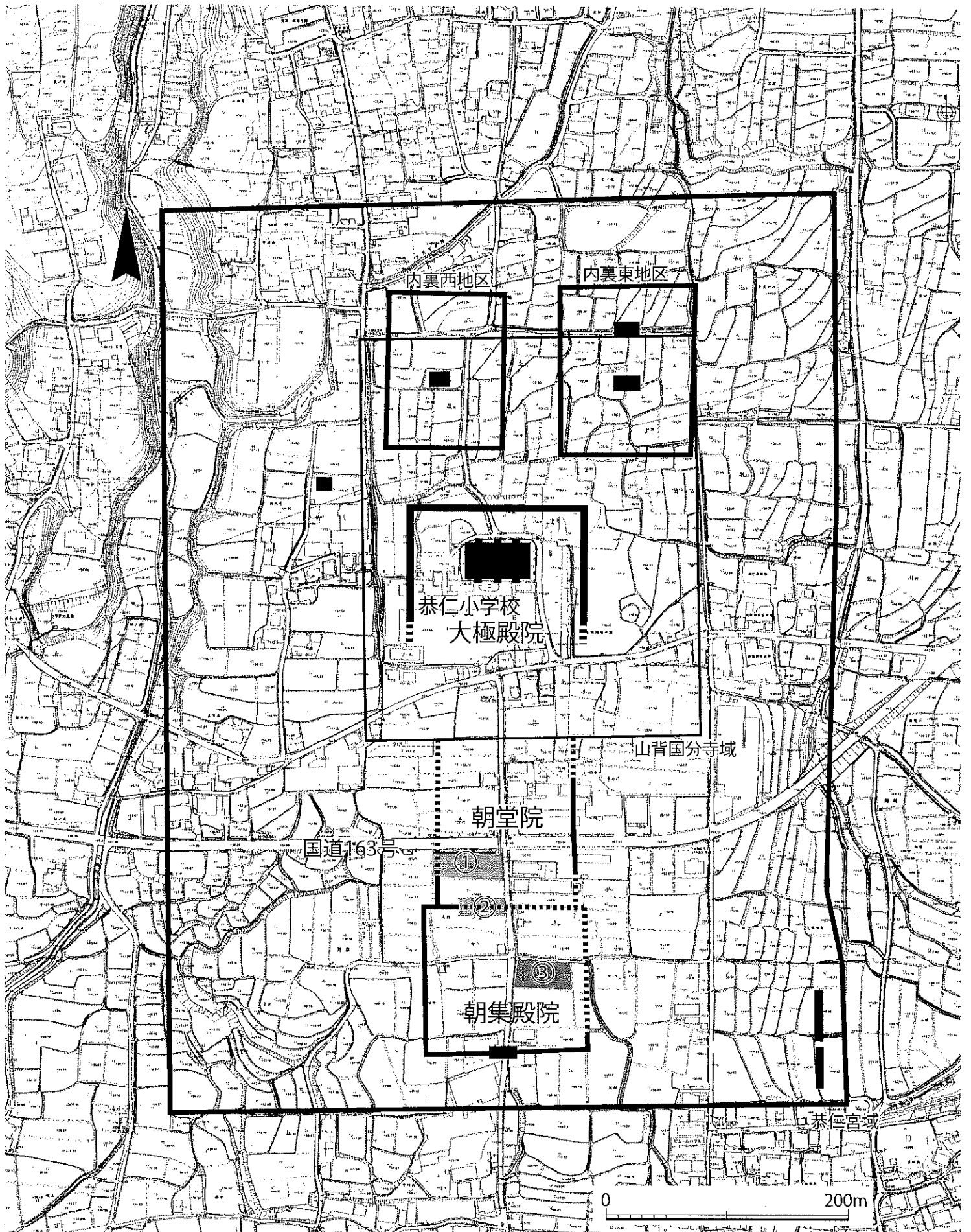
恭仁宮は東西に約560m、南北に約750mの大きさを設計され、その周囲は高い土塀（築地塀）で囲まれていました。

大極殿は、宮の中心から少し北側に造られており、高さ1m以上の大きな土壇の上に造られた東西が45m、南北が20mもある大きな建物でした。朱塗りの太い柱を大きな石材（礎石）の上に建てた礎石建物で、北西と南西の隅に置かれていた礎石は、当時のまま動かされていないことが調査によってわかりました。

大極殿院を取り囲む回廊は、北西隅付近を確認しています。回廊は築地を中央に築き、その両側を通路にした「複廊」と呼ばれる立派な形式のものです。奈良時代に関する公の歴史書である『続日本紀』には、平城京から恭仁京へ都が遷された際、平城宮の大極殿とともに、その周囲に設けられていた「歩廊」が恭仁宮へ移築されたことが記載されています。発掘調査の結果、恭仁宮の大極殿や築地回廊が、平城宮と同じ規模で造られていることが確認され、『続日本紀』の記述が裏付けられました。

大極殿の北側には、内裏に相当する施設が東西に2つ並んで設けられていたことを確認しています。現在のところ、この2つの区画をそれぞれ「内裏西地区」、「内裏東地区」と呼んでいます。このような施設の配置は、恭仁宮以外には見られなかったもので、どちらが天皇の住まいされた内裏なのかは、はっきりしていません。「内裏西地区」は、周りが全て板塀（掘立柱塀）で囲まれた、東西約98m、南北約128mの大きさです。「内裏東地区」は北側が板塀（掘立柱塀）で、残る南側、東側、西側は土塀（築地塀）で囲まれた、東西約109m、南北約139mの大きさで、「内裏西地区」より一回りほど大きく造られていることがわかっています。

朝堂院・朝集殿院では、これまでその周囲を区画する板塀（掘立柱塀）の一部が確認されています。朝集殿院は、東西約134m、南北約125mの規模で、南側の朝集殿院南門が見つっています。朝堂院は、朝集殿院よりも東西幅がやや狭くなることがわかっています。このことから、恭仁宮が平城宮を手本として造られた可能性があることもわかっています。



第1図 恭仁宮跡全体図及び平成26年度調査対象地位置図(1/4,000)

平成 26 年度調査でわかったこと

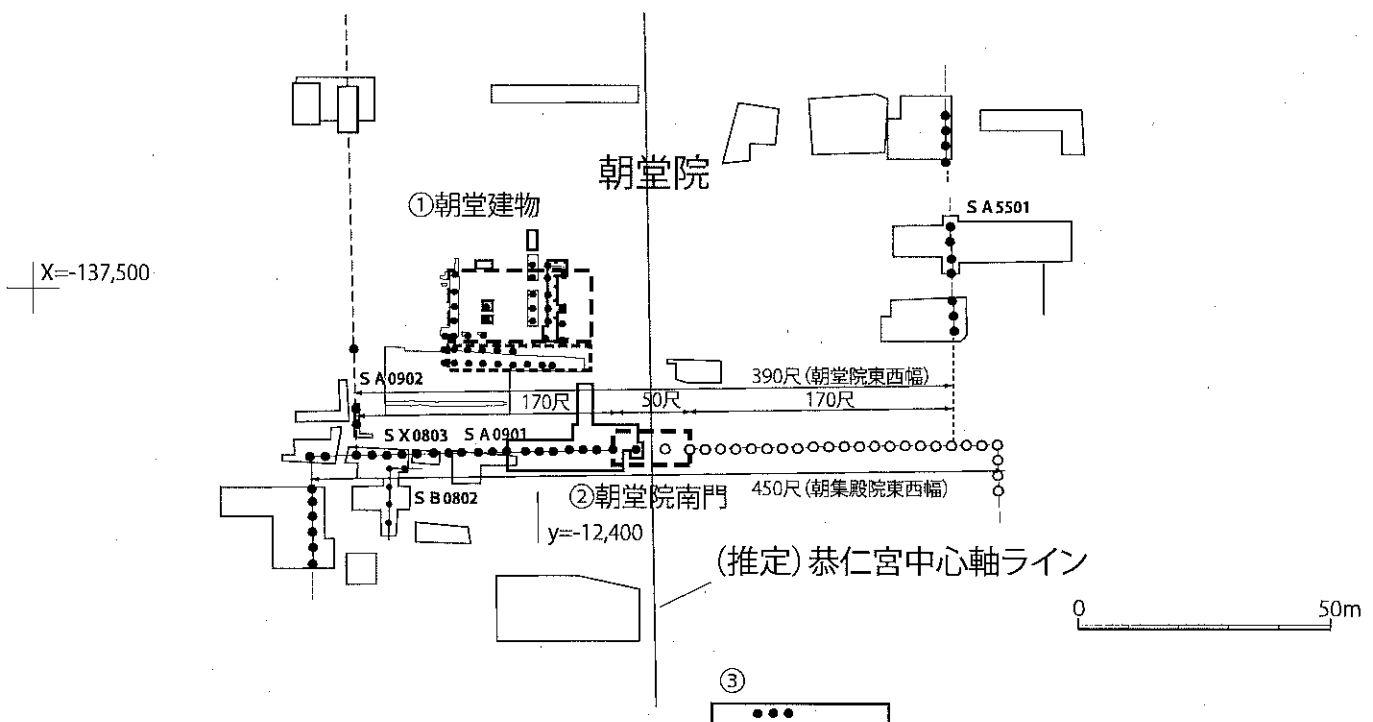
(1) 朝堂院建物の調査

朝堂院の内部には、平城宮跡では 12 棟の建物が、難波宮跡では 8 棟の建物が整然と配置されていることがわかっています。そして、恭仁宮跡では平成 24 年度に初めて朝堂院の南西端に位置する建物が見つかりました。

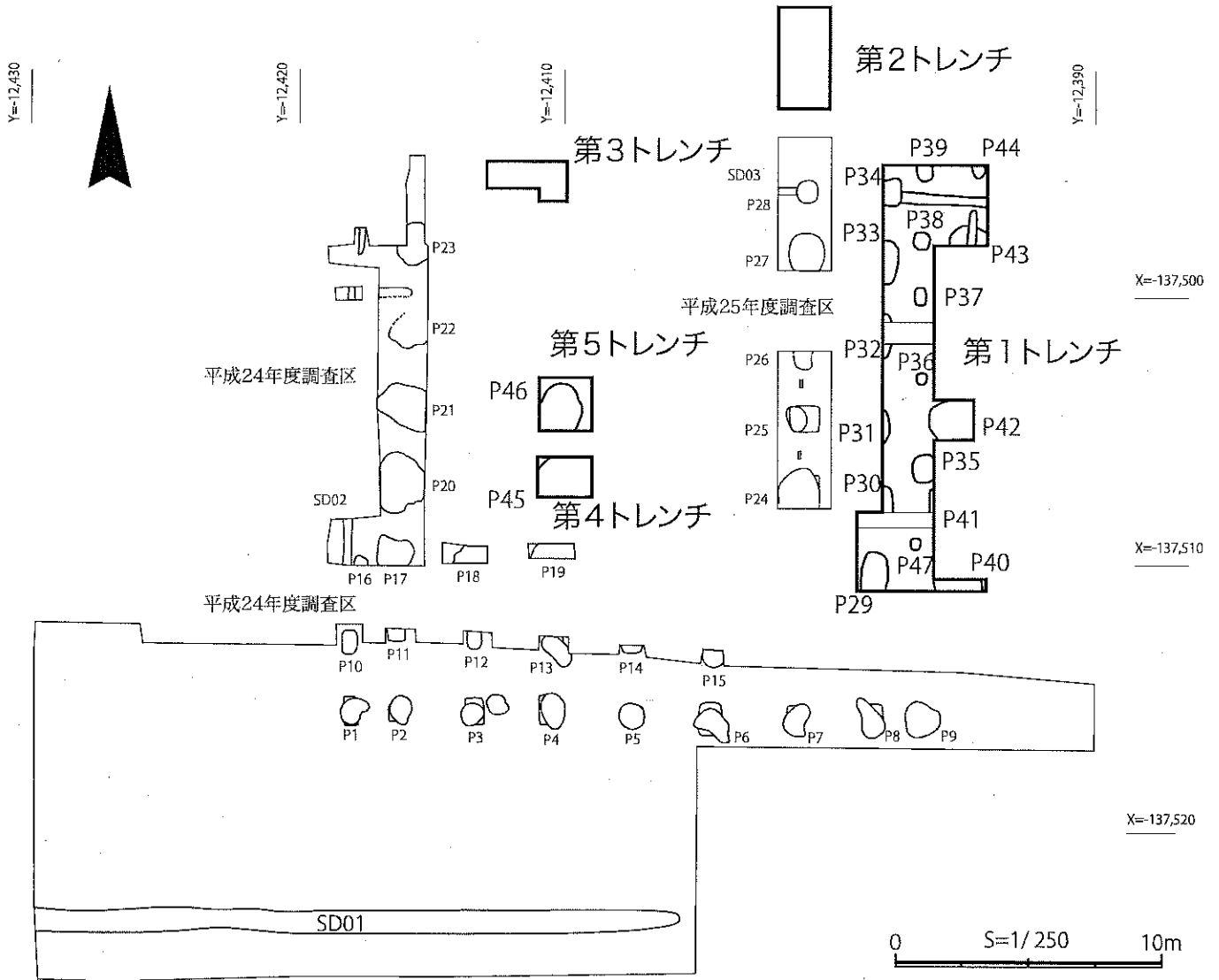
平成 24 年度の調査では、建物南辺および西辺の柱穴 23 基 (P 1～23)、南辺、西辺の溝 2 条 (SD01・02) が見つかりました。平成 25 年度の調査では中央部付近で南北に並ぶ柱穴 5 基 (P 24～28) と建物北辺の溝が 1 条 (SD03) が見つかりました。

今年度は、この建物の規模を解明するため、建物の東辺と推測される地点に第 1 トレンチを設定し、さらに建物構造を把握するために第 2～第 5 トレンチを設定しました。

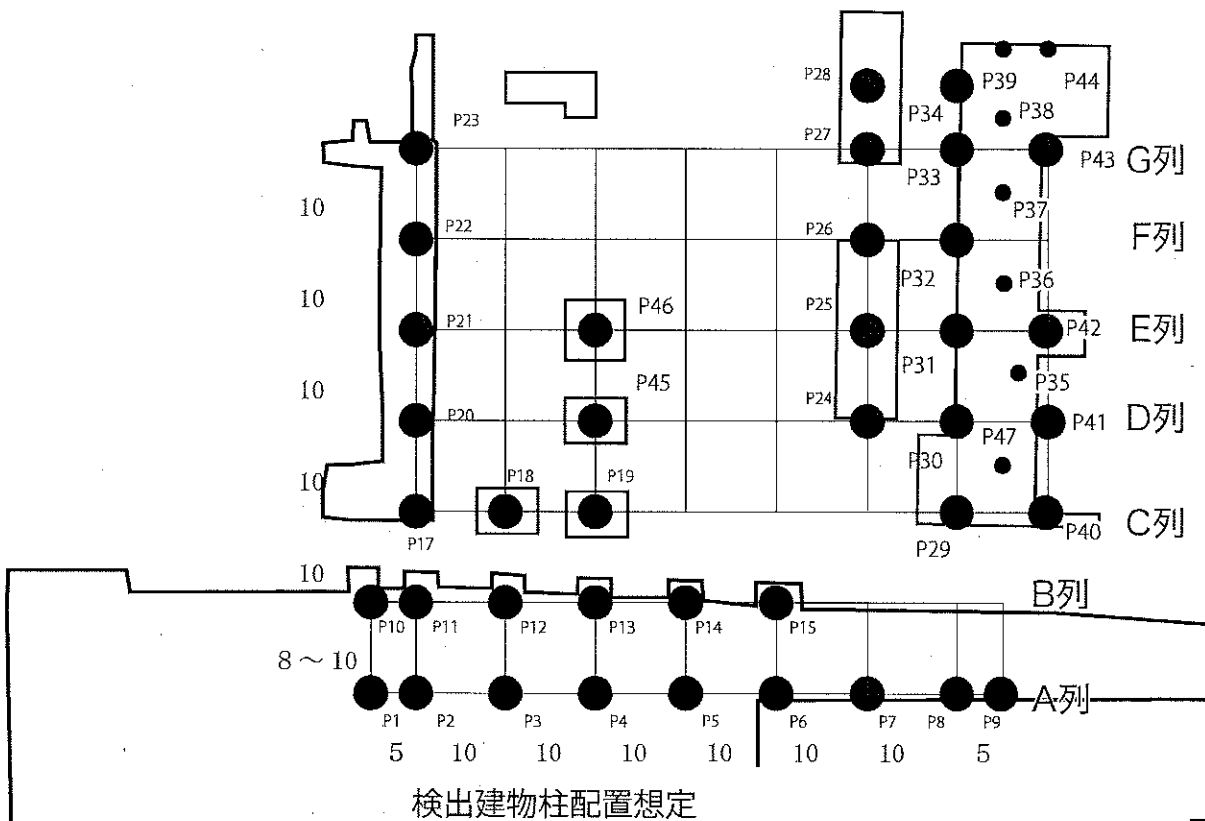
第 1 トレンチでは新たに柱穴が 17 基 (P 29～44・47) が見つかりました。柱穴 P 29～34 は南北に並び、これまでの調査から推測される位置で見つけることができました。しかし、そこから東に 5 尺 (約 1.5 m) の位置で見つかった南北に並ぶ小規模な柱穴 P 35～39、47 は柱の位置が他の柱穴とそろって



第 2 図 恭仁宮跡検出遺構配置図 (1/1,500)



平成 24~26年度 調査トレンチ検出遺構



第3図 朝堂院建物 平成24~26年度トレンチ平面図

ません。建物の建築や解体に伴う足場穴や、床を支えた柱穴跡と推測されます。第1トレンチを部分的に東に延ばしたところ、柱穴P 29～34から東に10尺(約3m)の位置で、南北に並ぶ柱穴P 40～43を検出しました。柱穴P 40～43は他の柱穴ときれいに並ぶため、朝堂建物の柱穴と考えることができます。この結果、南側のA、B列の東端がC列～G列とそろわないため、別建物であることが分かりました。また、当初北辺と想定した柱穴P 34、39の東にはきれいに並ぶ柱穴が確認されませんでした。

第2、3トレンチは建物の北辺を確定するために設定しました。両トレンチからは遺構が検出されなかったため、北辺はG列(柱穴P 23、27、33、43)であることが確定しました。

第4、5トレンチは中央部の柱穴の有無を確認するため、調査しました。両トレンチでは柱穴P 45、46が検出されました。

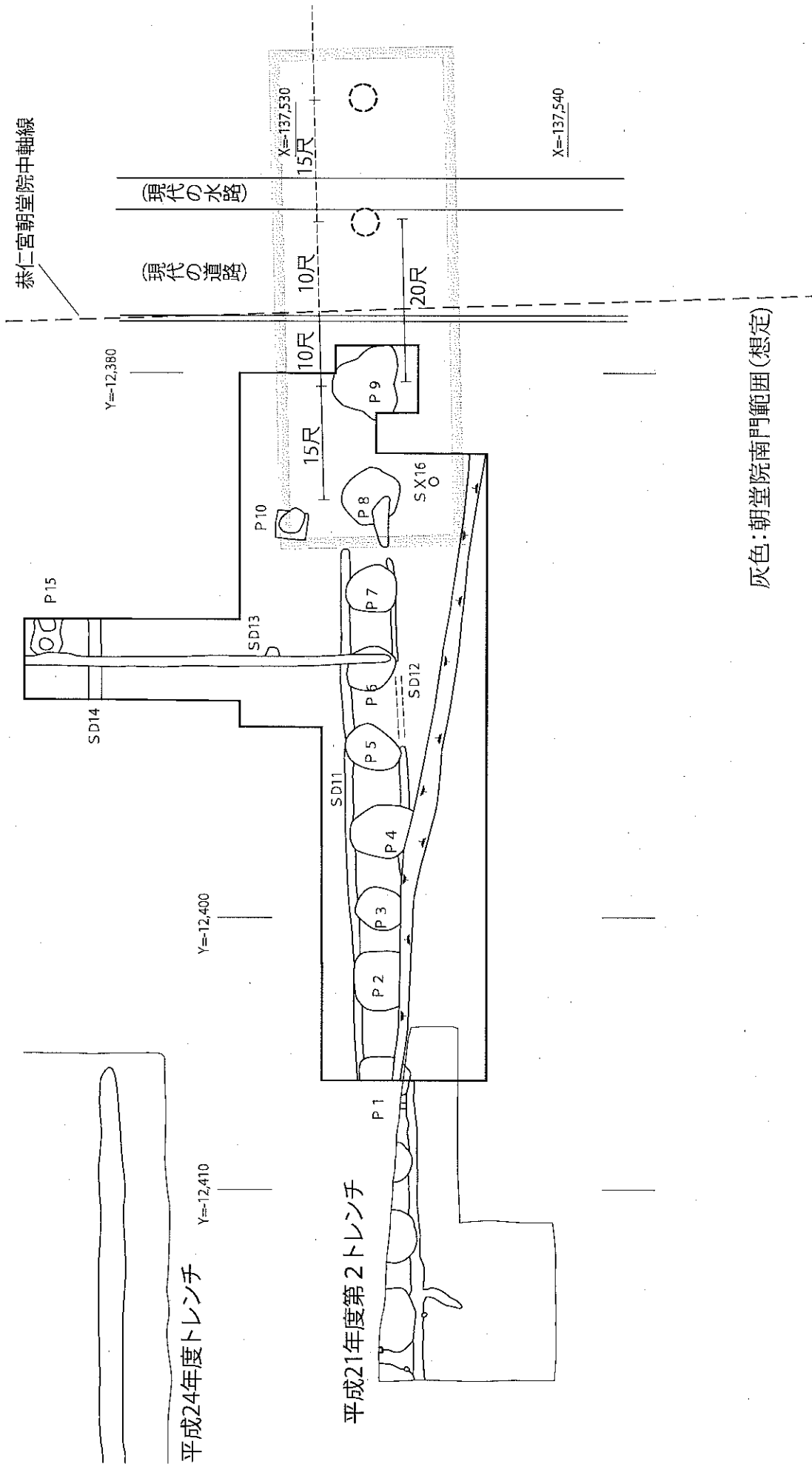
今年度の調査では、以上の成果から2棟の建物が南北に並んでいる可能性が高くなりました。北側が主な建物(C列～G列)で、南側は付屬的な小型建物(A列～B列)と考えられます。また、建物規模は南、北、西の範囲はこれまでの調査で確定していますが、北側の建物はまだ東に延びる可能性があります。

(2) 朝堂院南門の調査

朝堂院の南辺は平成21年度までの調査で柱が10尺(約3m)間隔で並ぶ掘立柱塀であることが判明しています。今年度は、これまで未確認の朝堂院南門を検出することを目的として、南辺の掘立柱塀と恭仁宮の中軸線上が交わる地点の西側にトレンチを設定しました。

トレンチの西端から、柱穴P 1からP 8までは、想定どおり10尺(約3m)間隔で並んでいます。掘立柱塀に伴う柱穴と考えられます。また、柱穴P 1からP 7に平行して南北に溝2条(SD11、SD12)を検出しました。柱穴に平行する溝は、平成21年度に実施された調査でも確認されています。この溝は掘立柱塀の雨落ち溝か、塀の土台となる基壇にかかわる痕跡と考えられます。

トレンチの東端まで柱穴列は続きますが、P 8からP 9の間隔は15尺(約4.5m)に広がります。P 9から恭仁宮中軸線までの距離は10尺(約3m)です。また、P 7とP 8の間では、掘立柱塀と平行する溝が途切れます。溝が途切れる地点から東が朝堂院南門の基壇になる可能性があります。また、P 8とP 9は、その位置が恭仁宮中軸線に近く、かつ柱穴の間隔が広くなることから、朝堂院南門の柱

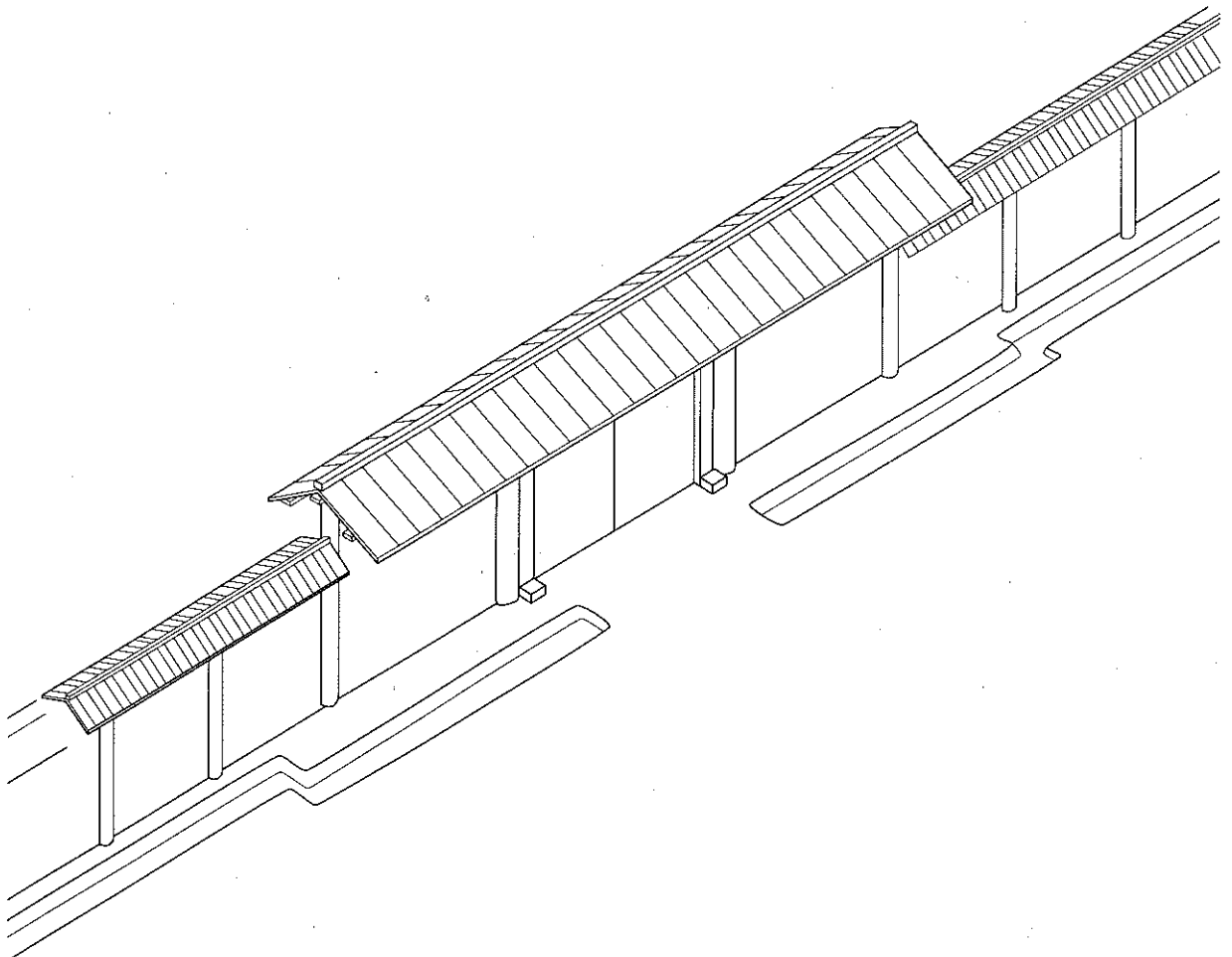


第4図 朝堂院南門推定地トレンチ平面図 (1/200)

穴と推定されます。

今年度の調査トレンチは中軸線よりも西側ですが、当時の宮は左右対称に造られているので、検出した柱穴の位置を中軸線から折り返して反転する事で、未調査の東側の柱の位置も分かります。すなわち、中軸線を挟んでさらに10尺、すなわちP9から20尺(約6m)東に1基、さらに15尺(約4.5m)東に1基の柱穴が推定されます。したがって、中央の幅が20尺、東西脇間の幅が各15尺、柱間の合計は50尺となります。また、溝の途切れる位置から、基壇幅は約60尺と考えられます。

通常、宮城の門は柱が礎石の上に立てられ、前後に控柱を備え、「四脚門」や「八脚門」という形式になります。また、門の屋根には瓦が葺かれます。しかし、P8とP9の南北には対応する控柱の跡が確認されませんでした。したがって、恭仁宮朝堂院南門は控柱を持たない棟門のような簡素な造りの門だったと考えら



第5図 朝堂院南門 復元想定図

れます。また、瓦が全く出土していないことから、屋根は板葺きであったと推定されます。

しかし、この門は極めて大規模で、これまで見つかった恭仁宮の門の中では最大規模のものです。宮の重要区画である朝堂院の正門としてふさわしいものと言えるでしょう。

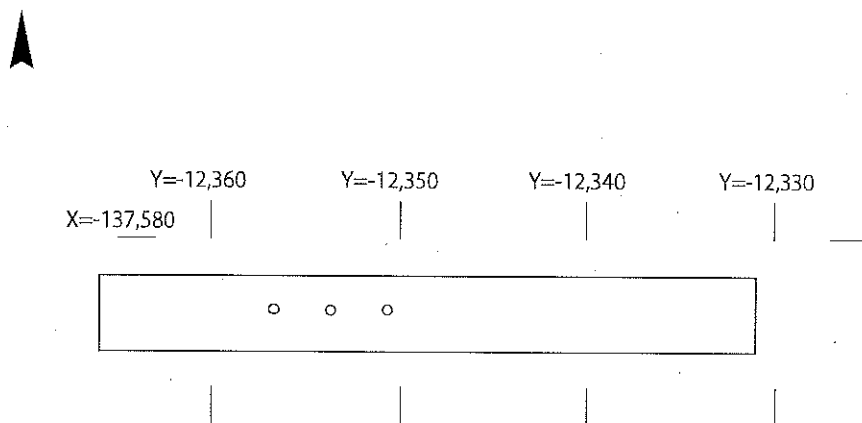
また、奈良の平城宮の朝堂院南門、壬生門でも宮の造営当初の門は、両端の幅が50尺の簡素な門であったことが判明しています。したがって、恭仁宮の朝堂院南門は平城宮と規模、構造のよく似た門と考えられます。

遺物として注目されるのは、柱穴P 8、P 9、不明遺構 SX16 から数点出土した塼せん（当時のレンガ）です。塼の出土が朝堂院南門付近に集中する事から、朝堂院南門に伴う遺物と考えられます。確証はありませんが、基壇外装に積まれたり、門柱を補強するために用いられたものと推測されます。

また、門の周辺では柱穴P 10、P 15 などが検出されています。建物の一部なのか、それとも単独で存在する柱なのかが、課題として残っています。

(2) 朝集殿院の調査

朝集殿院は、朝堂院に入場する前の官人たちの待機場所と考えられる区画です。他の都城では朝集殿院の内部に「朝集堂」と称される建物が確認されていますが、恭仁宮では未解明です。今年度のトレンチの中央やや西よりの地点で柱穴を3基検出しました。柱穴の間隔は10尺（約3m）で、朝集堂に伴う柱穴の可能性がります。周辺の関連遺構の有無を検討する必要があります。



第6図 朝集殿院トレンチ平面図 (1/200)

まとめ

今年度の調査では平成 24 年度から継続的に調査している朝堂建物の構造を解明するには至りませんでした。しかし、これまで 1 棟と考えられていた建物が 2 棟である可能性が高いこと、東西に長い建物であることなど、新たな知見を得ることができました。朝堂建物に小規模な建物が付属する例は他の宮には存在せず、恭仁宮の朝堂建物が異例な構造であることは確かです。今後もこの建物の解明を根気よく進めていく必要があります。

今回の調査ではじめて確認された朝堂院南門は、板葺きで掘立柱の簡素な構造の門ですが、初期の平城宮にも類例があることから、奈良時代の宮城の造り方を解明する上でも大きな成果を挙げることができました。類例である平城宮朝堂院南門、壬生門は当初簡素な門ですが、その後、控柱を持つ瓦葺きの門に整えられます。恭仁京は足かけ 5 年で遷都となったため、整備の途上にあり、仮に遷都しなければ、平城宮と同等の門に造り替える計画だったことも考えられます。

朝集殿院はこれまでまとまった調査がされていませんでしたが、今年度にはじめて大規模なトレンチを設定し、調査を行いました。検出された遺構の評価は現段階ではできませんが、今後の周辺の調査による内部構造の解明が期待できます。

恭仁宮の朝堂院、朝集殿院は奈良時代の国家運営にあたって極めて重要な場所です。奈良時代の遺構が良好な状態で残っていることがわかったのも、今年度の大きな成果と言えます。

最後になりましたが、今回の調査に際し、調査に参加していただいた皆さん、各方面から御指導、御協力いただいた方々に、深く感謝いたします。
